

神学者 ジョン・ウェスレー

岩本 助成

1 ジョン・ウェスレー及びメソジスト研究の現況

小論はジョン・ウェスレー*1 を神学者として概観する試みである。まず、ウェスレー、及び、メソジスト研究の現況はどのようなものか。世界各国の研究を網羅して述べ得ず、選択的になることを許していただいて、研究現況の一端に触れたいと願う。

英国において、ウェスレー歴史学会 (Wesley Historical Society) は 1893 年に創設された。以後、学会誌を発行し続ける。国内での研究や学会活動は、オックスフォードとケンブリッジを始め、各大学、神学校において盛んである。ウォルシュ (John Walsh) やターナー (John Munsey Turner) など研究者が活躍する。*2 「メソジスト歴史事典」二冊が出版された。英国における研究水準を反映しており、メソジスト関係資料として役立つ。*3

米国においては、メソジスト系神学大学を中心にして研究や学会活動が活発である。アウトラー (Albert C. Outler)、ベーカー (Frank Baker)、ハイツエンレイター (Richard P. Heizenrater)、オーデン (Thomas Oden)、ラ

ンヨン (Theodore Runyon) とウェスレー学者の名前を挙げれば切りが無い。ウェインライト (Geoffrey Wainwright) やハーワーワス (Stanley Hauerwas) ら、ウェスレー神学の影響を受けた神学者も活躍する。*4 コリンズ (Kenneth J. Collins)、ガンター (W. Stephen Gunter)、マドックス (Randy L. Maddox) ら研究者の著作が相次ぐ。福音派学者がその多くを占めるウェスレー神学学会 (Wesleyan Theological Society) の本年度の研究テーマは、「三位一体論とキリスト者生活」であったと仄聞する。同学会の研究成果は学会誌に記載され、ネットでの利用も可能となりつつある。

これら英米のウェスレー研究の成果は、ジョン・ウェスレー全集校訂版の出版という偉業となって現れた。いわゆる Bicentennial Edition である。全 34 巻が刊行中で、現在までに 15 巻が出版された。BE 版全集こそ、今後のウェスレーやメソジストの研究に大きく寄与する基本資料である。なお、近年、活動を強めつつある「チャールズ・ウェスレー学会」の存在をも忘れてはならない。

世界のメソジスト研究者を網羅する「世界メソジスト歴史学会」(World Methodist Historical Society) の活動がある。また、ドイツ、フランス、スウェーデン、スイスなどヨーロッパ各国の学会中からその一例を挙げると、ノルウェー・メソジスト学会の充実を示す好著が出た。*5 アジア諸国では、特に、韓国における研究の進展に注目したい。

わが国におけるウェスレー、及び、メソジスト研究はどうであろうか。戦前の開拓的な研究を受け継ぎ、現在、日本基督教団更新伝道会で、鋭意、研究が続けられている。特筆すべきは、野呂芳男氏を中心にして発足した「日本ウェスレー学会」であり、『ウェスレーとメソジズム双書』と題した学会誌

¹ 人名表記について、筆者は「ジョン・ウェスレー」と表記するが、本学会で慣用表記である「ジョン・ウェスレー」を採用されたので、本小論では慣用表記を用いる。

² John Walsh(ed.), *The Church of England c.1689-c.1833*, Cambridge Univ. Press, 1993. John Munsey Turner, *The Conflict and Reconciliation: Studies in Methodism and Ecumenism in England 1740-1982*, Epworth Press, 1985.

³ Charles Yrigoyen, Jr. and Susan E. Warrick(eds.), *Historical Dictionary of Methodism*, Scarecrow Press, 1996. John A. Vickers(ed.), *A Dictionary of Methodism in Britain and Ireland*, Epworth Press, 2000.

⁴ G. Wainwright は, *Methodists in Dialog*, Kingswood Books, 1995, "Tradition and the Spirit of Faith in a Methodist Perspective" in *New Perspectives on Historical Theology* (ed. B. Nassif), Eerdmans, 1996 など、S. Hauerwas は, *Sanctify Them in the Truth: Holiness Exemplified*, T & T Clark, 1998 で、ジョン・ウェスレー神学に触れている。

⁵ Tore Meistad, *Martin Luther and John Wesley on the Sermon on the Mount*, Scarecrow Press, 1999.

が続いた。また、同氏によるウェスレー神学の本格的な研究が世に問われ、基本的な文献となっている。^{*6} 更に、英国史研究の伝統を活かした岸田紀氏の研究書が反響を呼んだ。^{*7} 山口徳夫氏の貢献を覚えたい。福音派における研究も地道に続いた。ウェスレーを思想・哲学の脈絡で捉えた清水光雄氏の好著がある。^{*8} われわれが欠落させ易い点を啓発する研究である。原典を引用しつつウェスレーをしてウェスレー神学を語らしめた藤本満氏の著作に、清水氏の著作と同様、画期的なウェスレー研究を見る者は筆者のみであるまい。^{*9} 喜ばしいことには、国の内外において専門的で学際的な研究を進める新進気鋭の研究者が生まれて来た。産声を上げたばかりの「日本ウェスレー・メソジスト学会」が、これら若い研究者の活動にとって何らかの助けとなることを願わずにはおれない。

2 「神学者 ジョン・ウェスレー像」をめぐって

ウェスレーやメソジスト運動をめぐり最近の研究を瞥見するとき、そこにいくつかの傾向を見出し得る。第一に、研究課題に対する広い視野と総合的な解釈とが要求されている。英国の代表的研究者、ウォード (W・R・Ward) が論じるように、たとえば、英国における福音復興 (覚醒) 運動を研究する場合、同時に、ヨーロッパ大陸における同種の運動との連関、及び、環大西洋地域を形成するアメリカ大陸における同種の運動との関係を、つねにその視野に収めながら研究を進めなければならない。ウォードは、反響を呼んだ著書において、まず、第 18 世紀のプロテスタント精神構造を分析した上で、シレジアと周辺地域から始めて、ザルツブルク、オーストリア、モラヴィア、スイス、ライン河流域地方に及ぶ福音覚醒運動を考察する。次いで、アメリカ植民地における同種の運動を検討した後、初めてそれらとの連関を確かめ

ながら、英国における福音覚醒運動の所在を研究する。^{*10} 今後、ウェスレーやメソジスト運動を論じる時、このような相互の連関を視野に収めつつ、その研究を進めることが要求されよう。

ジョン・ウェスレー自身、米国のジョージア伝道に赴いたし、ヨーロッパ大陸にヘルンフォートを訪れた。アメリカで彼が出会ったモラヴィア派の人々は、ヨーロッパ大陸からアメリカ植民地伝道に派遣された人々であった。最近の英国モラヴィア派研究によれば、彼らの目が英国に留まるまでに紆余曲折を経たようである。モラヴィア派教会の人々の目がつねに新大陸に注がれていたからである。^{*11} このように、彼らの連関はヨーロッパとアメリカという二つの大陸と英国という一つの島国とを結んで、微妙に行き交っていたのである。

第二の傾向は、ウェスレー研究、及び、メソジスト研究におけるテーマの多様化である。われわれが研究するこの人物とその運動自体が、実に多様なものだったからであろう。メソジスト派の進展は、単に教会の伝道や牧会活動のみならず、政治や経済に影響を与えた。教育や情報・出版を含む広い文化活動へ、都市や農村における各種組合運動へと、多種多様な発展を遂げた。しかも、上述の通り、国際的な活動であった。従って、多様な研究課題が細分化され、専門的になっていくことは止むを得ない。同時に、多様性を貫く統合性を求める研究も要求されてくるのではあるまいか。

第三の傾向を述べて、小論の中心的論点に近づきたい。ベーカーは、かつて、ジョン・ウェスレーには 100 を超える伝記があり、20 を超える人物像があると述べた。^{*12} これらの人物像の中で、神学者ジョン・ウェスレーという観点が、最近、研究者の関心を集めつつある。彼の校訂版全集が出版され始めたこと、特に、説教集全 4 巻を用いた研究が可能となったことが、理由の一つに挙げられる。これらの基本資料を精査して、彼の神学思想に迫る

⁶ 野呂芳男『ウェスレーの生涯と神学』日本基督教団出版局、1975年。

⁷ 岸田紀『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房、1977年。

⁸ 清水光雄『ジョン・ウェスレーの宗教思想』日本基督教団出版局、1992年。

⁹ 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年。

¹⁰ W. R. Ward, *The Protestant Evangelical Awakening*, Cambridge Univ. Press, 1992.

¹¹ C. Podmore, *The Moravian Church in England 1728-1760*, Clarendon Press, 1998.

¹² F. Baker, "The Real Wesley", in *Methodist History* (July, 1974).

ことができるようになってきた。

更に、カール・バルトが指摘した「正規でない教義学」への注目が集まりつつある事実を挙げたい。バルトが言う「正規の教義学」とは、学校や学派と関わる教義学のことであり、「正規でない教義学」とは、教会の伝道に際して起こってくる問題を、教義的に問う教義学のことである。^{*13} 教義学的な論文、聖書注解、説教、パンフレット類、建徳的な文書に込められた教義学である。バルトは後者の実例としてジョン・ウェスレーの名を挙げなかったが、ウェスレーこそ、バルト流分類による「正規でない教義学者」として論じるべき神学者であり、思想家である。コリンズは、ウェスレー神学について「説教神学」という見方を提起するが、説教を中心とする教義学の展開に神学者ウェスレーの面目が躍如としている。^{*14}

では、なぜ、馬に跨がった伝道者ウェスレーという人物像だけが定着してしまったのか。神学者ジョン・ウェスレーというイメージは、なぜ後方に退けられてしまったのか。このような像の定着は、残念ながら、彼の神学や説教を詳細に研究した上での結論ではなかったのである。

ジョン・ウェスレー像の変遷はウェスレー研究史の変遷そのものを示している。例えば、第 19 世紀英国メソジスト派の興隆期における同派の自己理解を見るとよい。また、同時期のアングロ・カトリシズムによる「メソジスト派に神学なし」との批判攻撃が、ある種の影響を与えたとも考えられる。いずれにせよ、ジョン・ウェスレーは、ウェスレー神学研究者の業績にも関わらず、一般的には、その神学的な内容を十分に研究しないまま、神学研究の対象から外されることが多かった。逆に、それは伝道を主たる使命とするメソジスト派の榮譽ではないかと考える向きもあるが、やはり、神学者ウェスレー像の排除は、学問研究上、的確なものとは言い難く、キリスト教神学史上の損失につながる。

3 ウェスレー神学の源流

ジョン・ウェスレーは、現在では、第 18 世紀アングリカニズムの代表的な神学者として高い評価を受けている。^{*15} 彼は単にアングリカニズムのみならず、大陸のカルヴァン主義、ルター主義、ピューリタニズム、更には、ローマ・カトリシズムや東方ギリシャ正教会に、その神学の豊かな源流を持つ神学者であった。

彼は何代かを経る聖職者の家系に生まれたが、少なくとも父方、母方とも、その祖父たちは、献身的ピューリタンであって、国教会からの迫害を受けた人々であった。しかし、非国教会派から改宗して熱心な高教会派となった両親から生まれて、彼は、幼い時からエプワース牧師館において高教會的な靈的養育と訓練とを受けた。彼が終生、国教会への敬愛と忠誠とを誓いつつ、同時に、教区組織や教会規定を越えて、国教会を内部から活性化しようと試みたことは、すでにその源流から運命づけられていたと言ふべきか。

オックスフォードでは、前世紀から同大学に盛んになった教父学研究成果を受け、古代教会、特に、ニケア前教父たちの著書に親しみ、生涯その学びから遠ざからなかった。シリア教会の神学者エフラエムやギリシャ教父、特に、ニュッサのグレゴリオス神学に多くを負う点を、神学思想史的に見逃してはならない。また、ウィリアム・ローやジェレミー・テイラーなどの国教会の「聖化の神学」に育まれながらも、同時に、ルター神学の香り高いモラヴィア兄弟団の内的宗教によって豊かにされた面を持つ。英国という島国に生まれ育ちながら、アメリカ大陸での伝道の志を実践し、あるいは、ヘルンフォートにまで靈的源流を求めて行った。しかも、その旅行で彼が見出したものは、ルター派敬虔主義との神学的齟齬であり、英国宗教改革者たちの福音信仰の源泉を再発見したことであった。もちろん、多くのドイツ語讃美歌と出会ったし、ベンゲルの『新約聖書略注』に見られるようなシュワーヴェン敬虔主義との出会いに導かれたことも事実であった。

彼は中世以来のローマ・カトリックの靈性、特に、フランスのカトリシズムの靈的伝統からも多くの洞察を得た。しかも、上述の通り、母教会が宿す

¹³ カール・バルト『教会教義学 神の言葉 I/1』吉永正義訳、新教出版社、1995年。

¹⁴ Kenneth J. Collins, *A Faithful Witness: John Wesley's Homiletical Theology*, Wesley Heritage Press, 1993.

¹⁵ Alister E. McGrath (ed.), *The SPCK Handbook of Anglican Theologians*, SPCK,

福音主義的な伝統の豊かさ、特に、クランマーら改革者にその源流を持ち、アンドルーズ (Lancelot Andrews, 1555～1626) ら優れた神学者にも流れる国教会神学、殊に、「国教会アルミニウス主義神学の伝統」を体得し、それらの神学的思潮を継承したと考えられる。^{*16}

ウェスレーの「公同精神」は、彼が編纂した『キリスト教古典叢書』と題された霊性シリーズの内容の多様さにはっきりと表われている。オックスフォード大学のウォルシュの言葉を借りるならば、「ウェスレーは、ヤヌスの頭のように、前方と後方とを見る二つの目を持っている」が、それはすでに彼の神学の源流から明瞭に示されているところである。^{*17} ウェスレーの一方の目は、教会が過去から継承している偉大な神学的伝統を凝視していた。同時に、他方の目は、教会や社会が抱える今日的な課題と明日への展望に注がれていた。教会の福音的伝統を学ぶことは、単なる懐古趣味からではない。現代的な諸問題を解決する上で、重要な啓発を与えられると確信しているからである。同時に、彼は、昨日から今日へ、今日から明日へと、真理が連続して伝達される事実を忘れていなかった。だからこそ、彼はメソジストの説教者たちに、ギリシャ教父を学ぶことの重要さとともに、アイザク・ニュートンの著作を学ぶ必要を説き得たのである。

4 ウェスレー神学の特徴

1) エプワースの四辺形、または、エプワースの三角形

ウェスレーの神学の特徴を述べる場合、「エプワースの四辺形」(Epworth Quadrilateral)と表現される。「聖書、伝統、理性、経験」の四辺形とも、「すべては救われる必要がある。すべては救われ得る。すべては救いを知り得る。

1998, pp.230～231.

¹⁶ Nicholas Lossky(trans. Andrew Louth), *Lancelot Andrews, the Preacher (1555-1626)*, Clarendon Press, 1991. なお、国教会アルミニウス派については岸田紀、前掲書、及び、山田園子『イギリス革命とアルミニウス主義』、聖学院大学出版会、1997年などを参照されたい。

¹⁷ John Walsh, *John Wesley 1703-1791: A Bicentennial Tribute, Friends of Dr. Williams's Library*, 1993, pp.9-10.

すべては全く救われ得る」とも表現される。前者の表現について言えば、聖書主義を貫きつつも、「聖書のみの強調」で止まらず、伝統、理性、経験を関連させる点、及び、四項目の「順序」にウェスレー神学の特徴を示そうとする。ウェスレー自身に忠実であるなら、彼にとって四辺形のそれぞれの辺は決して等しいものではなかった点を指摘し得よう。後者の表現は、すべての者 (all) への救いの福音、救いの普遍性にウェスレー神学の特徴を捉えようとしている。贖罪の普遍性を言うのであって、時として誤解されるような万人救済説の主張ではない。

四辺形という見方のほかに、彼の神学の特徴を「エプワースの三角形」(Epworth Triangle)と要約する見方もある。「神の普遍的な愛の絶対性、人格的な信仰の必要性、罪の世に有限なからだとして生きる者たちへの神の無限の恵み」の三点である。問題点を整理しながら理解しようとする際、このような要約は便利である。ターナーが説明する「エプワースの三角形」を少し追って見よう (Turner・45)。

まず、神の普遍的な愛の絶対性という特色である。ジョン・ウェスレーは原罪の教理を受け入れた。1745年、当時の英国カルヴァン派との神学的相違を尋ねられて、ルターやカルヴァンに學びつつも、同時に、急進改革者や英国アルミニウス主義の伝統 (ナットール [G.F. Nuttall] が、オランダのアルミニウスの立場と分けて"Arminianism of the heart"と呼ぶ伝統) に従って、「普遍的な愛の絶対性を強調する神学に立つ」と答えた。つまり、人間の原罪を全墮罪に見ながらも、同時に、恵みが万事に先行する立場を取った。先行の恵みはすべての者が神に向くことを可能とするが、もし、彼らが福音を拒むならば、自分の滅びは人間の責任であると論じた。このような立場から、当時の英国カルヴァン派に優勢であった二重決定説と論争せざるを得なかった。G・ラップによって一般化した "an optimism of grace" というウェスレー神学の特徴は、当時の啓蒙思潮が宿していた "an optimism of nature"、及び、当時の英国カルヴィニズムの "a pessimism of grace" と対照的に表現されたものである。^{*18}

¹⁸ E. Gordon Rupp, *Principalities and Powers*, Epworth Press, 1952, pp.76-93.

第二の特色は、人格的信仰の必要性である。ウェスレーは改革者の伝統、特に、クランマーなど英国改革者神学を継いで、信仰に強調点を置いた。神の側には赦しと受容があり、人間の側には神への確かな信頼がある。すべては恵みの賜物であって、功績的な要素はあり得ない。「奴隷の信仰から、子の信仰へ」と変えられることが大切であり、「神の子としての共通の特権と言うべき確証を、断罪の痛みを加えて脅迫的に語らないこと」を実践した。

第三の特色は、恵みの無限性の強調である。神がわれわれと共にいますこと、われわれの内にもいますことをメソジスト信仰の強調点とした。「愛の成熟」の神学は、英国宗教改革者の「信仰による義」を基盤としつつ、英国アルミニウス主義神学の解釈を加えたものである。敬虔主義の影響も否定できないが、同時に、カロライン神学者による聖化の神学の影響を受けた。また、彼はオックスフォード時代に、第4世紀のシリア教会の神学者エフラムを深く學んだ。東方ギリシャ教父、特に、ニュッサのグレゴリオスの「エペクタシス論(絶えず神に向かって前進するという思想)の神学」から、「愛の完全、愛の成熟への絶えざる歩み」を持続的な過程(プロセス)において見る解釈を継承している。完全を「何か特定の状態」としてではなく、「恵みの中にあるいのちの旅路」において受け取ることを學んだ。それは静止主義的なものでなく、切望し続ける愛であり、同時に、訓練される愛であった。このようにウェスレーは完全を「愛の完全、愛の成熟」において考えたので、無罪性そのものが核心的問題とはならなかった。全き愛とは、「倦まず、たゆまず、熱情的に、心を砕きながら、相手のために尽くし切る、他者への関心と行動」であり、「愛によって働く信仰」にほかならない。同時に、敬虔主義的傾向に附随する内向性からウェスレーを救ったのは、晩年、彼をして奴隷解放の提唱に向かわせたような「社会的な関心の強さ」であった。彼にとってホーリネスとは、「社会的ホーリネス」以外の何ものでもなかったからである。

2) 両面価値性 (Ambivalence) の神学

われわれはウェスレー神学の特色を瞥見したが、筆者は、改めて、彼の神学を両面価値性の神学として論じたい。現代は多様性が尊重される時代である。神学の分野においても同じことが言える。第18世紀英国を生きたジョ

ン・ウェスレーは、やはり多様性のあらわな時代を生きた。彼の神学は上述の通り、両方向への神学とか、多声音楽(ポリフォニー)的な神学とか表現される面を持つ。ウォルシュの表現を借りるならば、ウェスレーはあれかこれか(either/or)という視点からではなく、多数を連関させる視点を尊んだ神学者(both/and theologian)であった(Walsh・12)。しかも、あれやこれやが雑然と併置されているのではなく、それらの多様性を統合するものを、常に追い求めていた。

今日、多くの研究者は、彼にとって多様性を統合するものとは何であったかを求めて探究している。多くのキーワードが提起されている。先に挙げたもののほかに、全き愛の神学、民衆神学、新創造としての人間、真実なキリスト者、応答的な恵み、生の聖化、エキュメニカル視点の確立、などである。フランスのウェスレー研究者オルシバル(Jean Orcibal)は、ウェスレー神学の独創性を、多様なものを「選択し、吸収し、和解させる独創性」に見るが、どのような一点にその統合を見出そうと独創的に考えたかについては、今後の研究を待たねばならない。^{*19}

彼は生涯、規範中の規範としての聖書を尊んだ「一書の人」であった。しかも、多くの文献を精読した人物であった。教会の伝統への敬愛に生きながら、同時に、熱狂派と誤解されるほど、伝統の枠を越えて現実的な諸問題に対応した。大衆の中に生きたがゆえに、民衆信心にも、ある程度の理解を示した。当時の啓蒙思潮を吸収しつつ、宗教思想については高教會的保守主義を貫いた面を持つ。^{*20}

行動と内省という両面性がある。ジョン・ウェスレーが行動の人であったことを疑う者はなからう。しかし、同時に、彼は内省の人であった。1738年5月24日の、いわゆるオールダーズゲイト経験を例に取ろう。「心、内に燃える」経験を与えられ、救いの確信を受けたのだが、それは感情を昂揚す

¹⁹ Jean Orcibal, "The Theological Originality of John Wesley and Continental Spirituality" in *A History of the Methodist Church in Great Britain* vol. 1 (eds. R.

E. Davies and E.G.Rupp), Epworth, 1965, p.110.

²⁰ B. W. Young, *Religion and Enlightenment in eighteenth-century England: Theological debate from Locke to Burke*, Clarendon Press, 1998.

る説教を聞いたからではなかった。ルターの『ローマ書序文』を聞いていた時であった。感情的要素を重視する回心物語には稀な経験である。神の圧倒的な恵みの御業が語られた時、それを内省しつつ「応答する恵み」の確信に導かれた。彼の神学的内省は、「回心」という言葉を愛用することから彼を遠ざけた。それは余りにも多くを内包する用語であったからである。むしろ、義認、新生、聖化など、救いをよりの確に表わす用語の方を好んだ。

彼の神学は、神論、創造論、人間論、キリスト論などにおいて、アングリカン神学の伝統を尊ぶ。同時に、聖霊論的、救済論的神学を強調した。これも両面価値性の現れであろう。聖霊の教理は、救済の諸問題、特に、いのちの癒しに結びついた。彼はすぐれた臨床的神学者の一人であったと言えよう。教義学全般を決して背後に押しやることなく、同時に、実際的な課題に対応した実用的な神学 (Pragmatic Theology) を形成して行った。メソジストの説教者たちに、「信仰義認をもっと語れ」と教えた彼が、生涯、「聖書のホーリネス」を標榜して、聖化と栄化を高調したという両面価値性がある。愛の終末論と呼ばれる彼の神学的な立場を忘れてはならない。

更に、伝道と礼拝・聖礼典という両面価値性を検討したい。ジョン・ウェスレーがイングランドのみならず、ウェールズやスコットランド、更にアイルランドに伝道したことは周知の通りである。彼は「洗礼による新生」の立場を尊ぶが、同時に、神の恵みとしての瞬間的悔改めと信仰の応答を力説した。両面価値性がここにも現れる。また、伝道や牧会に多忙な彼が、毎主日の聖餐礼拝を待ち切れずに、週日にさえ陪餐していた「聖餐論者」であった事実を知る人は、案外、少ない。彼はクランマーの聖餐観を批判的に継承して聖餐の神学を樹立した。年一回の陪餐で事足れりとした当時の国教会の一般的風潮に逆らって、「恵みの手段」の高調を通して教会形成に励み、礼拝と聖礼典の重視によって信仰の個人主義化を防いだと思われる。ホホワイト (J. F. White) は、ウェスレーの聖餐観を評価して述べる。「ウェスレーはこのジュネーブの宗教改革者にすら欠落していたようなユカリストにおけるバランスのとれた理解を生み出すことに成功した。……ウェスレーはプロテスタントの立場からひじょうに積極的な形でユカリストの犠牲理解を提示した人物であったが、それは『教父学的-カルヴァンの』な意味における神秘とし

ての臨在に結びついた理解であった。ウェスレーは、交わりという主題と共に、終末論的な主題や聖霊論的な主題もひじょうに生き生きとした形で表現している」。^{*21}

実践面に触れるならば、彼は国教会に対する敬愛を、教会内教会のネットワークや活性化された細胞運動を通して、生涯、保ち続けた。大衆伝道を行なう反面、少数グループを対象とする牧会活動にいそしみ、両者は両輪のような関係を持った。全国をしばしば伝道旅行したこの人物が、毎年冬期にはロンドンを離れずに、根拠地におけるメソジスト運動の牧会に励んだ。彼は第 18 世紀英国において、知識階層と一般大衆、識字者層と非識字者層との間に交わりの橋をかけて、両者の交流につとめた。また、ウェスレーの清潔好きは有名であるが、ホガースが描くような病気と悪臭が満ちる貧困階層の人々の間に身体ごと飛び込んでいった。ノミやシラミにたかられ皮膚病に感染しながらも、この清潔好きの聖職者は貧しい人々と交わることを止めなかった。彼は当時の知識階層がそうであったように社会的な問題を論じただけで終らず、問題の渦中に自ら入って行った。

ウェスレーは福音主義的でありつつ、カトリック的であったと言えよう。聖書と伝統を、信仰と倫理を、緊密に結びつけようとした。啓示と理性が関連において考えられた。神の主権と人間の自由という問題、普遍的な贖罪と神の選びという問題、救いの確信と止まることを知らない全き愛への成長という問題に、神学的に健全な緊張関係を覚えながら、思想的統合点を模索して行った神学者なのである。

5 ジョン・ウェスレー神学の評価をめぐるモルトマンの場合

ウェスレーの神学を研究する業は、教派的伝統への郷愁ゆえであってはならない。また、ウェスレーに決定的な典型を求めてはならない。彼に万能薬的な効果を求めてもならない。その点、以下に論述するウェスレーに対するユルゲン・モルトマンの考察は、よりの確なものであってわれわれの研究にい

²¹ J. F. ホホワイト, 越川弘英訳『キリスト教の礼拝』, 日本基督教団出版局, 2000年, 366

くつかの示唆を与える。^{*22}

ウェスレーやメソジスト主義に関するモルトマンの理解は、学生たちとの共同研究において得たものであると言う。単にメソジスト運動についてだけでなく、ギリシャ正教会神学に関しても、共同研究が彼に実りをもたらした。モルトマンの真摯で率直な研究への態度は、彼の神学思想への賛否はさて置き、学問研究における自由闊達さと謙虚を深く教えるものがある。

ウェスレーやメソジスト神学に対する彼の理解は、他の神学者が時として、ウェスレーを精査しないままで「的を外した批判」に陥ることに比べるなら、より正確に彼を解釈していると評価できよう。モルトマンはその組織神学論叢のうち、「聖霊論」の論述において、「生の聖化」という章を掲げて、ルターと比較しながらウェスレーの神学思想の分析を試みる。

彼は、まず、両者の時代的背景から論じる。罪の消滅と義の到来は、ルターやカルヴァンが用いる中世的贖罪論では、自己に死ぬことと聖霊によっていのちが与えられることで表わされる。ルターの聖化論は、彼の十字架の神学ゆえに、日々悔改めて自己に死ぬことが強調され過ぎており、聖霊による新しいいのちに生きることの展開が弱いと批判する。宗教改革者たちの時代的特徴、中世的教会社会の特徴、ローマ教会法によって法律化された回心の表象に触れる。幼児洗礼が前提になっている社会ゆえに、信仰生活の時間的始まりが明確でない点が顕著であるとも論じる。

モルトマンによれば、ウェスレーによって、われわれは初めて、成立しつつある第18世紀の産業社会の世界、機械のもとでの労働規律と無産階層についての表象世界に入った。ウェスレーにとって、罪は、償わねばならない法律違反としてではなく、治療されねばならない病いという表象を持った。罪を、裁きの概念より、いのちの概念、新生の概念で理解しようとした。ウェスレーは、罪人が義認につねに立ち返るとのことより、むしろ、宗教的、

道徳的罪人の更新の過程に多くの関心を持った。病人が自分の癒しに参加するように、すべては神の恵みによるのではあるが、罪人も霊的な癒しの過程に参加できる。神の恵みとは、罪を犯す意志を捉えて解放し、意志の中に新しい力を目覚めさせるものだからである。生の聖化は、ウェスレーにおいて五段階を経る。(1) 神の先行的な恵みが自然的な良心を目覚めさせ、意志を強める。(2) 説得力のある神の恵みは、義認に先んじて悔改めをもたらす。(3) 神の恵みそのものが、義認という相関的变化において、また、新生という実体的変化において体験される。(4) 神の恵みは、必然的に一步一步の「生の聖化」となる。(5) 信仰者は、聖霊によって全く浸透され、キリスト者の完全な状態—神化—に到達する。完全な愛である。それは罪なき完全性ではなく、完全な救いを活動的に待ち受けることとして理解された。完全な健康の目標なしに、健康に至る過程も成立しないのと同じである。

ウェスレーにとって、聖化は生活経験における義認の必然的結果である。神の恵みは、信仰によって認識できる「説得力のある恵み」であった。モルトマンは、ウェスレーが信仰者の主体性の発見に貢献したと評価する。信仰経験は正しい教理への同意だけでなく、日付を入れ得る「心暖まる体験」であった。ウェスレーは、生の聖化をルターのように召命への忠実な義務履行において見たのではなく、自覚された、自発的で徹底的に組織された、個人的・社会的信仰生活の中に見たのである。商業から衛生に至るまでの生活範囲において、神との一致を示す聖性と、自己自身との一致を示す幸福という生活態度の規律を発見した。成立しつつあった当時の産業社会にあって、孤立無援の無産階級に、ウェスレーは「方向付けと安定を見出したキリスト教的な生活規律」を与え、彼らに生きていくべき故郷を与えた。彼らは、過酷な労働において失いつつあった自覚を、宗教的、道徳的規律に従って取り戻した。メソジスト運動は、成立しつつある産業社会の宗教となって行った。そのことを、モルトマンは労働組合の結成がメソジスト派と関連する事実を述べて例証しようとする。

モルトマンは、ルターとウェスレーの神学思想の違いを示すために、1741年9月3日に行なわれたウェスレーとモラヴィア派指導者ツインツェンドルフとの会談内容のすべてを引用して論じる。モルトマンは、メソジスト派の

頁。

²² J. Moltmann, *Der Geist des Lebens: Eine ganzheitliche Pneumatologie*, C. Kaiser,

1991, S.178~185, 『いのちの御霊—総体的聖霊論』蓮見和男、沖野政弘訳、新教出版社、1994年、245~256頁。

生の聖化の神学が、当時の英国における産業社会の病いに治療的に作用した事実を認め、続いて、ポスト産業社会への移行の直中にある現代社会の病いの癒しのために、今日のキリスト教的生活は何をすることが可能なかと問いかけている。

モルトマンがウェスレーを「生の聖化」という論点において捉えた点を、また、ポスト産業社会が抱える多くの疾患に直面する今日の世界と教会にとっての、ウェスレーの神学的貢献の大きさを率直に認めた点を評価したい。皮相的な研究に止まることなく、彼が行なうような問題の核心に迫る考察を数多く重ねることを通して、教会が今日的課題に答えつつ歩む力を与えられるからである。

6 ジョン・ウェスレー神学の研究課題

では、ウェスレーの神学研究が抱える課題とは何か。この点を論じて本小論を結びたい。ウェインライトは、以下に挙げる六つの課題に、ウェスレーのビジョン、プログラム、実践活動の要約を見るが、それは、また、第 21 世紀を前にしたわれわれの神学的課題であると言っても過言ではない。^{*23}

「(1) 彼は、キリストにおける神の贖いの御業についての基本的、基礎的、不変の証しを、聖書そのものに見た。」

第 18 世紀の英国を中心に活動したウェスレーは、彼の時代の人々に、特に、教区教会からはみ出した形で生きていた人々に、聖書の使信を、可能な限り充実した内容において語ろうと努力した。聖書からその使信を聴き取り、救いの福音の核心は何かをつねに追い求めた。われわれも今日、地球世界の一員として、聖書の福音に活かされながら、聖書そのものが語り出す使信を、より正確に、より平易に、より根底的に解き明かさねばならない。「聖書的」ホーリネスの伝達に生涯をささげた人物が、この点で多くの示唆を与えてくれよう。

「(2) 彼は、伝道の御業に献身し尽くした。その伝道とは、すべての造られた者に宣べ伝えられるべき福音の伝道のことであり、信仰によって受け入れられるべき福音の伝道のことである。」

伝道とは、道なる主イエス御自身を伝えることである。すべての被造者に対して伝道する使命を、われわれは主から受けている。また、神の賜物としての「信仰の応答」を強調する使命をも受けている。神学が説教神学という一面をもっていること、また、「伝道神学としての神学の意義」を深く洞察したウェスレー神学を批判的に継承して行かねばならない。

「(3) 彼は、キリスト教会の伝統と教理とを敬愛した。それは寛容な正統性 (generous orthodoxy) であって、その神学的意見が、使徒的な教えに忠実である限り、他と異なって存在し得る、多様であり得る正統性のことである。」

ウェスレーが古代教会や母教会の伝統と教理に対して示した敬愛は、その生涯を貫くものであった。しかも、「古代教会の伝統に忠実である限り」という限定を示しながら、異なった見解への受容性を豊かにもった「寛容な正統性」に生きた。エキュメニズムの精神と実践とが強く要請される時代に生きるキリスト者は、あくまでも正統性を重んじつつ、同時に、他と異なる多様性を尊重する神学を志向したこの先達から、正統性と多様性についての基本的態度を學んで行かねばならない。

「(4) 彼は、聖化を尊んだ。聖化は、それ自体のうちに、信仰者の道徳的な誠実さと愛の行動とを示すからである。」

ウェスレーは、信仰者をすべての罪から贖い、愛において完成する神の恵みを信じた。彼は自己に帰着するのではなく、神と隣人とに向かう愛において「完全、完成、成熟、成長」の神学を樹立した。それはこの世で達成可能な愛であり、道徳的な誠実さと愛の行動に実るものである。同時に、それは絶対的な完全でも天使的な完全でもなかった。瑕疵がないという意味での完

²³ Geoffrey Wainwright, *Methodists in Dialog*, Kingswood Books, 1995, pp.283~

全ではなかった。すべての源泉を愛に持ち、キリストの新しい律法を充足して生きる完全であった。このように「今、ここ」を歩む者ほど、神の愛の源泉のみを信じて生きる者は、他にいないであろう。

「(5) 彼は、彼をもっとも必要としている隣人たちに対して、社会的な関心をあらわし、奨励した。」

ウェスレーが社会的ホーリネスを高調し、その実践に生きた歴史は、今日、ウェスレー研究が集中的に取り上げている課題の一つであろう。「ウェスレーとメソジストが第 18 世紀英国を流血革命から救った」流の過大評価を口にする人は、今は存在しないであろう。しかし、彼らの信仰、神学、また、様々な更新運動を決して過小視してもならない。第 18 世紀のイングランドやフランスにあって、貧困の実態はどのようなものであったのか。また、救貧制度や対策はどのように進展したのか。あるいは、当時のいわゆる知識層が貧困を取り上げて論じながらも、なぜウェスレーのように実際的に関わっていかなかったのかなどが考察されねばならない。^{*24}

奴隷解放を制度改革という観点から見れば、確かにウェスレーが果たした役割は大きかったとは言えない。しかし、彼の信仰、神学、実践を継承した人々が、奴隷解放のみならず、教育に関する諸問題、社会福祉の問題、貧困者救済の対策、刑務所改良、日曜学校に見られる識字教育や成人教育、政治や経済倫理の浄化、各種の組合活動、公衆衛生問題など、人間の霊（いのち）に関する多くの問題と取り組んで行った。このような結実はウェスレーとメソジスト運動によって播かれた種子に負うところが多い。しかも、われわれが目指したい点は、それらが単なる制度改革や実践課題といった事柄ではなくて、愛の神学という根本的な源泉から生じているという事実なのである。正に、「愛によって働く信仰」が結んだ実だからである。

「(6) 彼は、聖餐を重視した。聖餐が、三一の神によって恵みのうちに与えられた交わりの礼典的しるしであり、讚美と感謝の応答的な犠牲だからで

ある。」

ウェスレーの聖餐論的、礼拝論的神学に早くから注目した人々もいた。しかし、研究の進展によって、彼の聖餐論の系譜が徐々に明らかとなり、彼の礼拝論的神学、頌栄論的神学の意義が明らかにされつつある。ウェインライトその人も、この分野において、単にメソジストの群れに対してのみならず、世界のエキュメニズムに貢献しているメソジスト神学者なのである。^{*25} このように、伝道、牧会、神学の分野のみならず、国際社会全般において、政治や経済や教育をはじめ諸分野において、われわれが今後、貢献すべき研究課題は実に多いのである。

(大阪キリスト教学院長)

²⁴ T. W. Jennings, Jr. *Good News to the Poor: John Wesley's Evangelical Economics*,

Abingdon Press, 1990 がその一例。

²⁵ Geoffrey Wainwright, *Worship with One Accord: where Liturgy and Ecumenism embrace*, Oxford Univ. Press, 1997.